

【書評】

保正友子 著『医療ソーシャルワーカーの成長への道のり
—実践能力変容過程に関する質的研究—』
(相川書房, 2013 年, A5 判, 230 頁, 2,600 円)

小 原 眞知子
(東海大学)

1. 現代の社会的背景と本書の意義

社会福祉事業に従事する職員数は年々増加しており、保健・医療領域でソーシャルワーク実践するソーシャルワーカー（以下、MSW と略す）の概数は 1 万人ともいわれ、公益法人日本医療社会福祉協会の会員数は 4,398 人（2011 年 1 月時点）であり、10 年で 1.5 倍も増加している。しかしながら、福祉職の離職率が高いだけでなく、就職しても短期間で離職することから社会全体での人材活用として十分に生かされていないのが現状である。ソーシャルワーカーの職務に対するモチベーションや満足度を高めるためには、労働環境や社会的待遇の改善もさることながら、個人の動機づけや専門職であるソーシャルワークに必要な資質や能力を高めるためのシステムを構築することはこれからの人材確保の観点からも急務であると考えられる。

わが国のソーシャルワークは、これまで専門性の確立や質の向上を目指して発展を続けてきた。戦後の貧困者救済から始まり、助言指導という立場から相手のニーズに沿った援助者という立場への変化、さらにソーシャルワーカーの国家資格化や、養成機関のカリキュラム整備に至った。しかし現状は、未だソーシャルワーカーの専門性に対する混乱やソーシャルワーカーのアイデンティティの曖昧さは存在している一方で、サービス利用者は増加の一途を辿っている。一方、近年の医

療ソーシャルワークは、疾病構造の変化、医療政策からの影響から、その専門性と質はますます問われているにもかかわらず、実践現場では日々の多忙な業務に翻弄されているのが現状であると考えられる。そのような環境におかれている MSW の実践能力の向上は各自に委ねられており、個人によって格差が生じている。このようなことから、人材を育成し支えていくプログラムの開発や組織的取り組みがますます必要になってくると思われる。

これまで長く、ソーシャルワーク援助方法は熟達した先輩から教わり、それを受けて新人ソーシャルワーカーは先輩から、ソーシャルワークらしきものを模倣し、秀でた技を自分のものとして身に着けるとしてきた時代があったが、MSW としての実践経験のある著者自身がソーシャルワーカーの実践能力向上がどうなっているのかに興味をもち、探究心をそそられたことから、この研究が誕生したのであろう。本書は MSW の実践能力全体の変容過程、各能力の変容と能力間の関連性、変容を促進する契機を解明することで、MSW の社会化の過程を含む、専門職育成の過程をまとめ上げている。これは、今後の MSW 養成のあり方に一石を投じることとなり、MSW の実践能力向上の支援システム形成に寄与できるものであり、ソーシャルワークの専門性の質の向上と発展に役立つものと考えられる。

2. 本書の構成と論点

簡単に本書の構成を紹介すると、第1章は、この研究の理論的枠組みが述べられている。研究で使用している主要概念である「MSWの実践能力」「新人期、中堅期、ベテラン期」の定義づけがおこなわれている。またソーシャルワーカーの実践能力に関する先行研究をふまえて、4つのリサーチクエスション、すなわち「1. MSWの実践能力の関連性とはどのようなものか」「2. MSWの実践能力変容過程とはどのようなものなのか」「3. MSWの実践能力の変容促進契機とはどのようなものなのか」「4. MSWの実践能力変容の節目と変容促進契機の関連性とはどのようなものか」と設定している。

第2章は、主に研究方法が記載されている。研究対象を急性期のMSWとした理由、選定条件・基準やその理由、研究協力者の内訳、データ収集法、データ分析法、さらに研究方法の長所と短所が述べられている。研究対象者は経験年数15年以上のMSW17人と経験年数8年から11年の中堅4名の計21人である。データ収集はインタビューガイドに沿って、半構造化面接を実施し、分析方法は事例検討とM-GTAの2種類を用いることなど、方法枠組みを提示している。

第3章は、17人の実践能力変容過程と変容促進契機を明らかにするために、実際の事例検討を通して、また共通要件に該当する4名を取り上げて実践能力の特徴を示し、各時期に影響を及ぼす変容促進契機の詳細を明らかにしている。具体的には、研究協力者17人の新人期から現在に至るまで、どのように実践能力が変容したのかについて、その語りの部分から「変化に影響を及ぼした事柄」のデータを抽出し、「価値、知識、技術を適切に統合して発揮」「各種システムとの関係構築」「専門的自己の確立」の3つの要素に分けて分析している。この中で、「変容を及ぼした事柄」は、学びの活動、もしくは病院内外の活動が大きく影響している。また、「学びの活動」「ケース対応」「他者からの影響」「社会的活動」「時代の影響」

「職場環境の変化」の6つが変容促進契機の項目であることを確認している。

第4章では、M-GTAで生成された概念とストーリーライン、結果図を示し、新人期、中堅期、ベテラン期のそれぞれの能力とその変容過程を分析し、それぞれの能力間の関連性を明らかにしている。その中で、MSWの新人期からベテラン期に至る各能力の変容および能力間の関連性には、3つのコアカテゴリーがあり、それらは、洞察の面接へのシフト、発信力の増大、介入ツールの豊穡化、根拠型実践への転機、ケースの予想化から成る「介入の安定」を図りながら、人脈蓄積、環境理解の進化、戦略の意識化、MSW評価の伝達化、信頼の獲得から成る「業務展開の基盤の形成」を行い、何でも屋からの脱却、客観的視座への意向、黒子への転化、上に立つ腹括り、MSW視点の俯瞰化、業務水準の保持志向化、自身獲得、受けとめ力の滋養から成る「専門的自己の生成」を行うストーリーで説明できることを結果としてまとめている。

また、これらに影響を与える要素は実践能力の向上に作用する。結果として、限界の認識、自己省察、新たな学び・活動の実施から成る「実践能力見直し作業」と実践能力の向上や抑制に作用する、ポジション変更への対応、政策動向への対応から成る「院内外からの養成への対応」が存在することを明らかにしている。

第5章では研究結果のまとめであるが、前述したリサーチクエスションについて検討し、その結果と先行研究の知見の比較をおこない結論に導いている。

3. 本書の特徴と成果

ソーシャルワーカーは（社会福祉士を含む）業務独占でないため、専門性が曖昧になっていることや、現場において理論と実践が伴っていない現状などから、その専門性に対する課題は数多く指摘されてきた。また、2006年より病院、診療所、介護老人保健施設が新たに社会福祉士の指定実習施設に加えられたことにより、保健医療分野での

ソーシャルワーク教育に1つの方向性が示されたが、保健医療ソーシャルワーク教育をどのように位置づけ、体系化していくのか、さらにジェネラルとスペシフィック教育をどのように位置づけるのかという課題もいまだ残されている。さらに、MSWは日々の業務に追われ、理論的な裏づけのもとに専門技能を用いて実践援助が行われているとは言い難く、現場における実践の非理論性が指摘されているところである。他方、現場からは理論と実践の乖離、すなわち理論の非有用性が指摘されてきた経緯がある。

このような現状から、本書の目指すMSWの実践能力の変容を明らかにしたことは、「ソーシャルワークとは」という本質的な問いに対して、何らかのヒントを与えている。また、ソーシャルワーカーの実践能力を実践援助から検証することにより、その事実に基づいたソーシャルワーカーの実践能力に関する理論の構築の一助を成すものとしての意義は大きい。

さらに、本書ではコンピテンシー、コンピテンス、ケパビリティと用いられている用語をキーワードとして「ソーシャルワーカーの実践能力」としているが、そもそもソーシャルワーク領域における実践能力に関する概念の導入は、主に欧米では早くからソーシャルワーク教育の中に取り入れられ開発されてきた、日本のソーシャルワーク教育でもカナダのトロント大学の大学院のプログラムが、日本に紹介されたことから広がった。その後、わが国では大学の実習評価システムにコンピテンシー項目を検討する試みや、職能団体でも研修体系の構築過程や認定社会福祉士に必要な実践能力を明確にするために、それらが検討されてきた経緯がある。このように、国内外問わず、「実践能力」は効果的ソーシャルワークを実施するうえでも非常に重要な概念であることはいまでもないが、本書で取り扱っているソーシャルワーク実践能力は、実に幅広い能力が要求されており、多層・多面的であり複雑性を帯びている。著者も述べているが、ソーシャルワーク実践能力に関する研究はさまざまである。しかしながら、ソーシャルワーク実践の専門性の向上のためには専門職と

しての責任、実践の質の担保、そのために知識や技術の向上に関しても実践の水準(standards)を明確にする必要があると考えられる。

わが国においてソーシャルワーク実践の専門性と能力の関連性や実践能力評価項目などはまだ十分に検討されていない。これまでわが国においては、ソーシャルワークの実践能力に関する研究はあるが、本書のような変容過程を取り扱った研究は少ないと思われる。その意味では本書の研究は意義深いものであろう。

加えて、研究方法論的視点から本書の特徴と成果を述べると、他の研究と同様、科学性が重視されてきた近年のソーシャルワーク研究の場合、科学研究方法は個人的に興味や動機があったものが、ひとりよがりのものではなく、公共性のある科学的な成果として他者から受け取ってもらう必要がある。本書の研究はいまだ明らかになっていないMSWの実践能力変容過程の現象を実践現場のMSWのインタビューを通して、質的研究を行うとしている。実際には事例検討とM-GTAを採用しているが、その長所については面接調査を用いることで、語られた内容をここで取り扱う、新人期、中堅期、ベテラン期を時系列に17人を横断的に分析したことで、その全容を把握することができること、また、同一人物の変容過程を縦断的にも分析できるとしている。さらに、変容促進契機を掘り下げることで、実践能力の変容に影響する仕組みを探ることができるとしている。一方、過去の実践について、現時点で語ることに對する限界性、そこについて、著者は「実践能力の変容過程の把握」よりも「実践能力の変容についての認識の把握」が実態に即しているのではないかと述べている。この点については、著者が目指していた「実践能力の変容過程の把握」をする場合、長期的にMSWの成長過程を追跡するコーホート研究などの調査手法もあり得るかもしれない。しかし、時間的な制約のある研究の場合は難しいだろう。本書の研究ではM-GTAの方法を用いて新しい概念の生成を試みている。この場合、理論的飽和化に至った段階で研究協力者からのインタビューを終了するが、今回はある程度の飽和化と

いうことで調査を終えている。それらの点については、今後、妥当性を検証し、より公共性の高い科学的なものを求められるかもしれない。しかしながら、質的研究を用いて 21 人の MSW のデータを緻密に分析し、得られた結果は貴重なものだと考える。

4. 課題と今後への期待

この研究は MSW の実践能力変容過程を明らかにしたことは大きな意義がある。これは、MSW 自身やこれから福祉職を担う者にとっても、自らの能力を向上させるために何らかの指標となる。ここでは課題と今後への期待について 4 点提示したい。1 点目は実践能力変容を促進する契機として、研修参加や研究会への参加があげられるが、この研究成果を職場内外の教育プログラムの検討に反映させていくことが期待されよう。2 点目は、明らかになった実践能力変容の過程を用いて、従来からある研修システムの効果測定やエバリュエーションを行い、マッチングするシステムを検討することも今後の課題であろう。3 点目は、研

究結果の中で指摘しているスーパービジョンのバイザーの役割、またバイザーの役割経験を経ることが能力向上の契機になっていることや、職務内容や職位・立場の変化がその契機になっていることなどを考慮すると、この研究成果を組織内システムの構築へどのように生かすのかなど、環境側面との関連性とその方策を深めて頂けることを願う。4 点目に、著者は副次的意義に離職・転職防止の検討につながることをあげているが、近年の医療現場では、新人であろうと多様なニーズに対応するために、即戦力が求められる。とすると本書でいう中堅、ベテランのもつ能力が要求される場合もありうる。このような実践能力を発揮することは専門職で構成されている病院組織におけるソーシャルワークの存在意義を提示することにもつながる。また、それは援助の質を左右するだけではなく、MSW 自身の職務に対する充実感、達成感、喜びを生み出すことになる。現在の MSW の現状とその課題に沿った形でこの研究成果の汎用性を高めていくことで、わが国の MSW を含む福祉職の短期間の離職を防止し、質の高い人材の活用に貢献できることを期待したい。